

「琥珀、お兄ちゃんをよろしくね」

「わかっているよ、正美」

頬ずりしながら愛らしく頼んでくるマイルスイートハートに、俺は微笑んでキスを返した。そして、下僕を先導して家を出て、一目散に小走りで目的地へ向かう。

「ちょっと、琥珀。引っ張るなってば！」

「うっさいわ、ボケ。黙ってついてこんかい」

生意気をぬかす慶士をひと睨みしたった。誰のおかげで毎日、散歩に行けてると思ってんねん。って、あ。どうも、ご無沙汰やね。俺、聡明で美しいと評判の美犬・琥珀いうねん。ほんまは『みんなの琥珀』で言いたいとこやけど、あかんねん。俺は身も心もハニー正美のものやからさ。堪忍してな？

そうそう、俺の言葉遣いがハニーには標準語でそれ以外には関西弁になってる所以についてはスペースの都合上、割愛さしてもらうわ。

話を戻して、そのハニーのお願いで、今日は慶士を那智のところに連れていったってんねん。お。よっしゃ、着いたわ。肩で息をつく慶士を急かしてインターホンを鳴らさせ、エレベーターに乗って那智の部屋まで行く。

出迎えた那智はいつ見ても俺と張る男前や。

「走ってくるほど俺に会いたかったんだ？」

「ち、が…琥珀が……うひっ」

感極まった顔で慶士を抱きしめる那智の趣味ばっかりは、今もってわからんけどな。超絶ヘタレな慶士のどこがええのか、さっぱりやわ。もしかして、馬鹿な子ほど可愛いいうあれやろか。それしか思いつかへんしな。

「これ……正美が、那智く……那智につて」

「ああ。ハネムーン候補地のパンフか」

「うえ！？ そそそれってそうだったの？」

焦る慶士を片手で抱いたまま、那智が早速ハニーが託した茶封筒から冊子を取り出した。

「付箋になにか書いてあるな。『モン・サン・ミシェルは絶対に外せませんわ。あと、那智お義兄さまは国際ライセンスをお持ちと伺っておりますので、ニースの海岸線をドライブもロマンティックかと思えます』か。海老原らしいチョイスだな。慶士さんはどこがいい？」

「おれは別に。き、きみがいればどこでも…」

うわ。慶士のアホが、言ってもうた。今の発言はやばいやろ。なんの計算もない無意識やから、むっちゃ性質が悪いねん。ああもう。ほら、見てみい。那智の目の色が変わってるやん。あかんわ。こら、しばらくここに足止めや。

「俺を煽った責任は取ってもらおうか」

「煽…？ …っんん」

盛り始めたふたりにいらっとする。俺かて、早う帰ってハニーの顔見たいっちゅうねん。でもまあ、慶士と那智もいろいろあったみたいやし、心の広い俺は大目に見たるよ。

それに、もうすぐ邪魔者がいなくなって、ハニーと水入らずのラブラブ生活も待ってるしな。

「やつ、あ……那智…」

「慶二さん」

でもやっぱ、俺も今すぐハニーといちゃいちゃしたなってきたわ。泊まるなんか言うたら、噛みついてるからな！